

續松葉集第四〔題簽〕

- 一 百首和歌奥書
- 二 松葉集奥書
- 三 四十八願之和歌
- 四 嵯峨之記
- 五 壽昌院母君をいためる言葉
- 六 予かおとうと重繼をいためること葉
- 七 家とうしめのおとうとをいためる言葉

續松葉集第四（内題）

百首和歌奥書

右百首の題は・和哥の浦の・わたの底を・きはめ玉を拾ひ給ひけん・人くのよみをかれし・跡を
 したひて・難波津のよしあしも・わかまへぬ・しれものゝ・渚にさまよひ・足すりをして・い
 さこをうかち・濱ちとり・あとをなんつくる事・人わらへならんかし・よしゑやし・芳野山の春
 の白雲も・風にさそはれ・龍田の川の・秋のにしきも・波にとゝまる・世にしもあらず・されは
 九つのちまたには・しつかなる栖を・もゝとむるにも・所えず・市の中には・をろかなる身の
 ・隠家もなし・六の塵に・まとひぬるうちにも・かのすきものに・心を入る時は・をのつからし
 はらくも・静なるに似たり・せはき住居の・内にしても・はるかなる海山を思ひ・廣からぬ家へ
 の・垣根には・植ぬ草木の・花を見・四つの時にしたかひて・移りかはる・鳥の音を聞にも・目
 わたるためしそ知るゝ・人しれぬおもひをも・我とひとしき友もなければ・誰にかは語らん・是
 にこそかつは・むねの煙も・晴ぬへきわさなれ・折にふれたる・月をめてぬとて・ねよとの鐘も
 聞入すゝ・いたつらに夜をふかす・すさひに・一首二首を・つらね・しぢのはしきき・事つく
 るまゝ・百にもをよひはへるならし

藻塩草かきあつぬめることわさは

をのかしゝなるあまのさえつり

「オ

「ウ

松葉集奥書

それ名所集・あまた有といへとも・今の代にあまねく人のもてあつかふは・類字名所和歌集也・此書先年・法橋昌琢・二十一代集の名所の哥・こと／＼書拔て・八巻の集を書出せり・それより以前・宗碩法師・勅撰名所集を書集り・又能因の哥枕・類聚名所和歌・建保百首・其外詞枕・名所集様く有へけれども・家々の倉の中・箱の底におさまりて・なへての人の見る事あたはず・しかあれば・廿一代集の外の名所の哥・見及ふにしたかひて・是を書付・十六巻の書となして・松葉集と名付る所・右しかり・オされは名所なるへき哥取出ても・國のしれさるたくひ多し・八雲御抄・或は藻塩草・夫木などを見合せ・粗国の名あるにまかせて書入侍る・我はかせになりて・物定めしたるにはあらず・唯古き集・又は古人書をかれたる抄ともを・書写あつむるはかり也・あるひは同名あり・或は一名に國の説く有・又書誤りて・あらぬ名所にしなしたる・歌もあらんかし・又ことほり聞えかたき哥も・わかつ簡に及はされは・力なく本のまゝ・書写し侍る・後に見ん人あやまりを改め・ちかひたるを直されん・師を頼むのみ・抑此集を書あつむる初め・明暦申の年・夏のころほひ・ふと思ひよりて・をしまつきに・むかひ・かたはし書付るに・あたかもやむことなき方より・仰せことありて・はけみいとなむかとし・それより此かたいもやすくせず・朝夕の身をたすくるうちにも・此事忘難くて・むねのやすらかなる隙もなし・我そのうつはものにもあたらすして・かくはけます事・をのか心のうちに・主人ありていはく・聞及ふ名所の数もおほからず・又哥人の讀をかれし・所々のことの葉にこそ・ゆきて見ぬ境をも・宿なから知たよりな

れ・濱ちとり跡つけをきて・老のなみの立居に・物忘れしやすき・たすけにもせよとなり・物うく
 むつましき折節もあれと・此掟いなみかたくて・をこたらずなしもて行まゝに『オ・五かへりの春
 秋をへて・よろつおさまるみつのとし・やゝこと成ぬ・此主人たれといふ事をしらす・臣又おな
 し・或人影法師にむかひていはく・汝は我はしれは走る・とまればとままる・いかんそ我とひ
 としくするや・かけほうしのいはく・わかなすわざにあらず・待人ありて・そのたよりをえてす
 る事也・又其人もその人のまゝならず・なさしむる方ありて・なさしむるわざと見えたり・誠な
 る哉・行住坐臥共に・我心のまゝの威儀ならず・心は臺の鏡におなし・むかふかたちをまちて影
 を移す・来らざる時は移らす・此松葉集いつこより来りて・心の鏡にうつりけん・おほつかなし
 ・しか『ア 有に・我國六十よこくの名所の歌書あつむるつゐてに・一首つゝ哥のやうにもあらぬ事
 ともを・かつつゝり書付る事侍き・人來りて名所の哥あつめらるゝは・我人の為さも侍らまし・
 みつから不堪の身として・多くの歌よみつらねらるゝは何の用ぞや・又耳馴ぬ名所よむ事・古來
 のいましめ也かたゝおそれ有へし・名聞におほゝれてあらぬ心のはゆるにや・さにこそあめ
 れ・しかしなから我詞たくみに・姿優美ならましかは・名聞の便ともし侍らまし・只はやうより
 此すき心のすたりやらて・かくつたなくあやしき言の葉を・すゝろに書とゝむる事・天つちの神
 もゆるされてよ・老『オ のなくさによみ侍る也・人に見する事にしもあらず・是そ浮身の思出な
 らんかし・さりとともかつてよまさるには・ひとしかるへからず・其故は和国の風俗として・神代
 よりはしまりて末の世に至るまで・たかきもつたなきも・さかしきものをろかなるも・もてあそふ
 事と聞えたり・鶯蛙の聲すら・哥をよまさるはなしといへり・いはんや人と生れて・そのたくひ
 にをとらんや・さるに心さしなき人は・いやしき身・愚なる心には・中ゝ思ひもかけぬ道と思

へり・数ならぬ山人あやしき賤^{シツ}のをたまきも・三十ひともしをつらねて・移^{ウツ}りかはる折くの・空
 に心をいたましめ・世渡るいとなみの中にも・かくろへ^レ事をもいひあらはして・つみとかを
 くる・身のうきにも思ひをのふるよすかとせは・よろつ神もよろこひ・其人^{ヤキ}を守り給ひ・もろ
 く^レの仏も・なとかあはれみをたれ給はさらん・此世のすさひ後の世・はたたのもしく・終^{マタ}にほた
 いの道にいたらん・されはやつかれこときの・をろか成ともからも・なへてもてあそふ世にしも
 あらまほしく・言よからぬさきらにて・池水のいひやる方もなく・岸^{キサ}うつ波の・みたりかはしく
 そしりをもかへりみす・恥^{ハヂ}をもわすれて・こちなき筆にまかせ侍るならし・にるはりのつくく
 おもへは・あら小田をかへすく・はくかりある・田子のしわさにこそ^レお

六字堂 宗恵

万治三^{庚子}八月上旬

レサ

四十八願和歌

南無阿弥陀佛

それ人のすかたにうかひ出る事は・五つのいましめをまたくしけるたねとかや・されはわくらは
 に此世に生れ来ても・いとけなき時・うたかたのあはとのみ消果^{キユツ}るもあり・やゝおさくしくな
 り・あるは甘とせ三十に及ふも・盛^{サカ}なる花の日数もまたて・あらしのさそふたくひもおほかり・

我又いかなるすくせのむくひにや・よのつねよりも身よはくわつらはしくて・春の日をむなしく
 送り・たれこめて秋の風をいたみ^{ハオ}侍し事・幾度^{イコタビ}といふ数をしらす・かるきをしのきをもきを
 ものかれて・四そちあまりの霜をいたくまで・なからへきぬるは有難^{ガタガタ}きにはあらずや・又佛の
 法にあふ事・わたつみの冲津^{オキツ}塩あひに・咲てふ花よりも・なをまれなるをしへを・心のまゝにき
 ゝ・ことに御法もあまたわかれし中に・芦間の月のさはりおほき・我らこときの・つたなくをろ
 かなる者をもとくたすけいまそかる・弥陀^{アミト}超世^{テウセ}の悲願^{ヒガン}にあひたてまつる事・何ことか是にひとし
 かるへき・抑弥^{オヨミ}施^セの四十八願の題号^{タイガウ}・かつつけ給りしまゝ・願文^{ガンモン}の六^{ロク}下^ゲに・かたはかりのやう
 に・三十あまり一もしをつらね侍し・海よりふかき願文を・あさきこと葉のえにまかせ侍る事・
 つくは山・は山しけ山・しけき木の・その一葉にも及ふましきを・かつは佛の御心にもおそれ・
 かつは人の耳^{ミミ}をはゝからすしもあらねと・かゝる御法を聞うる事・なをさりならすは思ひながら・
 高砂の尾上にたてる松の難面^{ナンメン}き心に・住江^{ジュエ}の岸^{カシ}に生る草の・忘やすきまゝ・かくつゝくるうちに
 も・仏のおほひなる恩^{オン}をも思ひ出・御名を唱^{ナゲ}んたよりにもならんと也・もろくくのくるしみは此
 身をかきりとし・なかき世^ヨうへなきたのしみを・うけん事のうれしさ・つゝむへきたりとも
 せはく・身にあまるよろこひを・寛永はたちのとし・夏の日そこはかとなく・筆をそめ侍るもの
 ならし

无三^{ムサン}悪趣^{アクシュ}

聞もうき三瀬川をはよそにしてちかひの海に浮ひぬる哉

不更^{フセウ}悪趣^{アクシュ}

わたつみの中にし流れ行水の又にこり江になとか帰らん

悉皆金色
シツカイコンシヤ

東路のみちのく山に咲花の色より外の身やは有へき」^ルワ

無有好醜
ムウコウシユ

津の国の難波入江にあらはこそよしあしといふ形をもみめ

宿命通
シユメツツウ

旅枕なかき眠の夢さめて思ひ出まし世々の古さと

天眼通
テンゲン

うは玉の心のやみの晴ぬれは見残す方も夏の夜の月

天耳通
テンニツ

四方山にすさふをきけは静なる心に遠き松風もなし

他心通
タシン

世の人の心のくまも見えつへし忍ふの山の道に入なは」^ルオ

神足通
ジンソク

足たゝぬうき世の人を憐みておこちすかひも深きかそいろ

不起想念
フキサツネン

置まよふ霜も日影に消ぬれは松の緑のあらはれにけり

住正定聚
ヂユウテイシュ

麻の中にましる蓬もなかりけりすくなる法の心のみして

二〇八二

二〇八三

二〇八四

二〇八五

二〇八六

二〇八七

二〇八八

二〇八九

二〇九〇

光明無量
クハウミヤウムリヤウ

月日にもこゆるといへははかりなき光を何にたくへてもみん

壽命無量
ジュミヤウムリヤウ

かきりなき命と聞もたのもしな鶴の林のむかし思へは」
コウ

聲聞無数
シヤウモンムジウ

足よはき車に法の人をたにくらともなく渡す彼國

人天長壽
ニンテンチャウシユ

千尋ある菌に生ぬる陰みれはいつも長き齡成けり

離諸不善
リシヨフゼン

生れんとねかふ心はにしの山さかなき名をもたぬ所に

諸佛称揚
シヨブツショウヤウ

いちしるき我大君の御名なればあたにも誰かとなへあくへき

念佛往生
ネンブツワウシヤウ

弥陀頼むしめちか原のさしも草さしもれしな深き誓に」
ニオ

来迎引接
ライカウインゼツ

むかへ来ん仏を拜むうれしさの涙や玉のをはり成らん

殖諸徳本
シキショトクホン

雨露の恵みを頼みうふる木のつるには花のさかさめやも

二〇九一

二〇九二

二〇九三

二〇九四

二〇九五

二〇九六

二〇九七

二〇九八

二〇九九

具足諸相^{グソクショサウ}

極楽に生るゝ人の三十あまりふたつのすかたそなへぬはなし

必至補處^{ヒツフシユ}

今しはと冬籠する梅の花春へになるも程はあらしな

供養諸佛^{グヤウショブツ}

水をむすひ花を手折て御仏にたてまつるさへうとき此世に二三

俱具如意^{ググニヨイ}

御佛にそなふるけをもこと／＼に心のまゝと聞そ嬉しき

説一切智^{セタイサイチ}

まことある心の月もいつみなる信太の杜の千枝あきらかに

得金剛身^{トクコンガウシン}

天地をうこかし山をぬくよりも法の力や猶まさるらん

萬物嚴淨^{マンブツゴンジヤウ}

あやしくも妙に七つの寶もてつくれる国に行て生れん

見道場樹^{ケンダウヂヤウジュ}

初瀬山春咲花をなかめても波かくらくそ思ひやらるゝ二三

得辨才智^{トクベンサイチ}

説のふること葉の花のさきくある御法をうへきことをしそ思

二〇〇

二〇一

二〇二

二〇三

二〇四

二〇五

二〇六

二〇七

二〇八

智弁无窮 チベンムジョウ

とく法の心こと葉もをのつかからかりなき身と成そかしとき

徹見十方 テツケンシツバツ

天地も八隅に見てる国くもくまなくみゆる法の光に

妙香合成 ミョウカウガフシヤウ

かほり来る池の蓮の追風にさそな涼しき道そしらるゝ

觸光柔輓 ソククハウニウラン

氷るし池の心もうちとけぬ光のとけき春にあひつゝ三

聞名得忍 モンミヤクトクニン

軒に生る忍ふの草もむつまじや後の世にうる名そと思へは

轉女成男 テンニョジョヤクナン

女郎花かりの色香は枯果て月さやかなる男山かな

聞名梵行 モンミヤワボンキヤウ

濁りぬる心の水も底すみて清くをこなふ身とそ成へき

聞名敬愛 モンミヤウジイ

世に越し名を聞からに月影のおほろけにやは人のあふかん

衣服随念 エフゾクズイネン

彼国のたちぬはぬてふから衣心にかけて身にそきるへき二

二〇九

二一〇

二一一

二一二

二一三

二一四

二一五

二一六

二一七

常受快樂
ジャウシユケラク

花鳥の聲も匂ひもこと更に浮世の外の春の明はの

見諸仏土
ケンシヨフチト

いさきよき国はあまねく打むかふ鏡に移る影を見ること

聞名具根
モンミヤウコン

いかにしてかたわ車と見えぬへき法の教にめぐりあふ身は

聞名得定
トクテヤウ

御名を聞人の心を種としてさとりの花のひらくへき哉

生尊貴家
シヤウケンホケ

梓弓やことなき身と成ぬへし此世に又も帰らましかは「ミツ」

具足徳本
グソクトクホン

ひたふるに頼みをかくる斗也うふるわさをは弥陁に任て

聞名見佛
モンミヤウケンブツ

いつしかに雲も霞も晴る夜の星を見ること仏をそみる

随意聞法
ズイイモンホフ

浮木よりあひかたきてふ御法をも龜井の水の絶す聞哉

聞名不退
モンミヤウワタイ

一筋に思ひそめにしけの色の又白糸に帰るものかは

得三法忍
トクサンホウニン

三二八

三二九

三三〇

三三一

三三二

三三三

三三四

三三五

三三六

吹風のひく梢の紅葉も散ての後そ静成ける」三四オ
 後の世をねかふこゝろもなかりけり

三三

南無阿みた仏の聲の外には
 「三三」

三三

嵯峨名月之記

春過夏暮て・八月も十日あまりになりぬ・秋の雨うちそゝきて・曇りかちなるそらに・月の名にもやたかはんと・人みないふかしく思へるに・十四日の月・山の端高くさし出るところいとほなり

あすの夜の名におふ空のさやけさを

かねてしらする月の影かな

三三

かくて明行空のけしき猶よし・けふは嵯峨の御佛開帳の日なり・又大澤・廣沢に「三四オ」さまよひありきて・今夜の月を見はやさんとおもひめぐらし・友とする人・二三人いさなひて・出たつ足もともいとかるく・草むらを分行まゝに・都のさかひに・一筋植たる竹の・秋をもしらてほこりたる・かしこを過て・藤の木の茶屋とやらんも・かたはかりにて・すむ人はなし・年ふりたる榎の木のおほきやかなるに・はひまとはるゝ枝も・いとこちたくねちけたる・いつの世に諸友に生れ出けんと・むかしゆかしく・又是もいつかは・薪にくたかるへき時を待らんと覺ゆ松の「三四ウ」みや・双の岡の麓寺とよみしは・今の仁和寺にやあらん・塔婆高くそひえ・何くれの堂やしる・軒をな

らへいとゆゝしく見ゆ・安井の里をゆくに・民の子とものくるしけに・わき田菰ほし・をくての
 稲葉もる・かりほの庵も哀に・里の名にも似ぬわきかなと思ひやらる・爰にかなめの地藏とてあ
 り・弘法大師の御作となんいふ・その寺の縁に腰をかけてやすむに・此あるしのおま・もと見し
 人なれば・いまたありやと問に・うちよりさたすきたる女の出てきたふ・年は「おより侍れと・
 いまたなからへ侍りて・隣の里へものして侍るなといへば・あはさる事はいなくて立出ぬ・常盤
 の里を過るに・かしらに物いたゝきたる人の来るをみれば・しれる人也・年ひさしく見さりけれ
 と・さまたかたちも衰へす・住人さへや面かはりせぬと・むかしいひけん思ひ出らる・千種の花
 いろ／＼に咲みたれて・なまめきたるも・見すくしかたくて・爰かしこ立やすらふに・閑帳やあ
 らんと・いそきあへるも心あはたゝし

ゆく道のほたしなりけり女郎華」

こゝろのさかの野ははるかにて

三三

からうして清涼寺にいたりぬ・かの尊形を年経ておかみ奉るに・いとうれしくたうとく・身の毛
 いよたつて・ぬかつく事やゝ久し・昔仏衆生の為の故に・西天に出生し玉ひし時・御母まや夫人
 のために・切利天にあからせ給しを・世の人戀忍ひ奉りしに・毗首羯磨・赤栴檀をもて・生身の
 佛になそらへて・作れる御かたちなり・されは利生済度の月の光もかきりあるにや・涅槃の雲にい
 らせ給ひしに・此如来はもろともに・鶴の林の烟と「おも立さらせ給はす・印度よりもろこしに
 わたり・それより我国につたはりおはします・又この寺ちかき比の火災にも・炎の中をのかれ出さ
 せたまひて・御つゝかなくわたらせいまそかる事・とにも角にも末の世の・われらこときもの
 ために・縁ふかき御仏にておはしますよと・たのもしく有難く・涙もとゝまらず・友人も袖を

しほりあへり・東の方に・かり屋の有けるを人にとへは・栖霞寺セイカシとなん・光君のいかめしう作らせ玉ふ・御堂なといへるも・此寺のいにしへならんかし・三尊サンソンのあみたならひて座ザし玉ふミツ・是もゆへある佛の作らせ玉ふと人の語る・さて二尊院ニソンインへまうてぬ・そのかみ漢朝カンチョウより・此国へはしめて佛經ブツキョウ釈迦シヤカ・弥陀ミダの・灵像レイゾウをわたされしに・時いまた至らざりけるにや・説トキひろむる人もなかりければ・此寺の寶藏ホウザウに・年久しく埋れさせ玉ふとなん・今は二尊の御かたち・いとたうとくたゝせ玉ふこそ・むかししられて有難けれ・それより北にあたりて・竹垣タケカキひろくしわたして・古たる寺あり・妓王妓女の住たる跡となん・立入て見めくるに・阿弥陀を安置アンジせり・脇に御厨子ミツシあり・内より比丘尼ヒキニの出来て・御戸をひらきけるに・昔シヨゴのあま君・所持ショジの本尊ホンソンノ下に・四人のありし姿・いと殊勝ジュシヨウに・ならひおはせり・友の中に・宗貞といへるか・狂哥キヤウカをなんよみける

妓王妓女とちこもりたる柴の戸も

いまは佛の御寺とそなる

三三

折から雨の降フリ出たるに・いとゝ物さひしく・内に比丘尼のひとりふたり・打しはふきたるも・哀におほえて・しめりたる心ちして侍るに・此哥になん興キョウをさかせて・人みなわらふ・空もや・晴るに・大沢にたとり行・池の見わたしいと廣く・めくりに松・柏カシハ・かえて・桂カキなナとやうの・年ふりたる木とも・枝をさし出葉をましへて・風にふかれたる音・さゝら波の汀によせ帰る聲きけは・心もさはやく罪もほろひぬへし・是やか八のくとかの池に・七の宝タカラもて作られたる樹ツキに・ふく風の音は・苦空クウクウ無常ムジョウ無我ムガの・御法をのふるとかやもおもへはよそならず・はちすの花は散果て・たち葉に露の置ツキあまりたるに・つらぬきとめぬ玉の散かゝれるを・浮葉の上にうけとめたるも・うれしけにみゆ・沢瀉ソコダカ・小水葱コナキ・勝見カツミ・芦アシ・名もしらぬみくさに・花のしろく咲るを・

遠かた人にとはまほしく・さらぬ浮草のさ「たオま」／＼生まれれるか・波にたゞよふを見て

大澤の池の波間のうきぬなは

うきぬしつむは世のならひかも

三三

盛者必衰のことほりなれば・世にさかへおこる人も久しからず・會者定離のならひなれば・あふものにわかるも程なし・たのしみかなしみ行かふといへる・誠にしかなり・此世のみにあらず・三界六道をめくる衆生・うかへる時は・上非想天までものほり・沈む時は・しも泥梨の底にいたる・いつくか常住の所ならん・おなし池の面を・浄土の莊嚴に見なし・あるひは流「たウ」轉輪廻になそらふるも・唯是一つ心のわさにや有らん・廣沢に来てみれば・北は山ちかくそはたち・西は堤に植たる柳の陰ふかく・東南ははれたり・誠に月の名ところとなんいひつへし・池の廣さ三返まはりて一里となん・所の人いひつたふる・汀にわらうたあや筵なとしきつゝ・並居て・うそふきあへるに・風のをとかはり・雲のあし飛かことして・又降くる音いとしきり也・池にそふてつくれる家あり・笠やとりにとて立よるに・あるし心ありて・杉の板戸をしあけ・さうじをひらきて内へよひ入ぬ・水鳥の波に「オ」きをふ聲・籬にすたくむしの音・雨の折にあひて・かしこまじき物から・うき世の眠もさむる心ちす・さりととも曇りもはてし・けふは爰に暮して・夜もすから月をめてはやとたのむも・おほつかなくいたうふりければ

ひろ沢のいける我世のおもひ出に

こよひの月の曇らすもかな

三三

雨は猶をやみもやらす・こゝに友真といふか讀る

月見んと千々にこゝろをくたき来て

帰るもおしき廣澤のなみ」ヨシ

三三

都ちかきあたりにと・先此宿りを・たつ妙心寺のほとりに・しれる人のかり行て・しはれる衣の袖をひろけ・足あらひなとして・やつこのもてりけるかいいひを・あやしきうつはものに盛て・とりくふ・あなしの法師・麦飯アヤイなどといへるもいとめつらかにもてはやす・けふはいたうつかれにけり・ひしりすこしてよなといひて・かたはしうたふ・かくしつゝ日没の鐘ニチモク・おとろくしう聞えて・雨は晴けれと・空いとくらく・道もいまたいふせければ・そこを出てひんかしへ帰りくるに・山きははかつく霽ハルて・雲間にもれ出る三〇月いとさやかなり・かゝらましかは・彼池にのみましものをと・返すく口おし・月の曇らすもかなといひけんは・さもあらんかし・晴間をたにしはし待やらて・たへぬ心の浅さを・さりとていかゝはし侍らん・作願サカガシをして行する心のあらましかは・真如ジンニの月は出つへし・願行具足ガンギョウゾクせされは・まことの道にはいたりかたしとなん・しかはあれとも・あか仏のたうときは・衆生のなすへき願も行も・六字の名號ミツジのうちに・成就シュウジユせ給ふて・罪深きわれら衆生にあたへ・一念にとなる人をして・彼無為涅槃ムキネハの國に三〇むかへとり給はんと御誓ミチカひいと有難く・誰もくゝなをさりに思ふへき事かは・西の京を過來るに・右りひたりの家居に・梵鐘フセウをならし・夜念佛の声きこゆる・残る暑さにや・門をもさゝて・簾レンかけわたし・はしちかく燈トモシビはそくかゝけ・五人七人・をのかしゝあつまりて申もあり・又夫婦フウフ年老たる親オヤなど・奥深く入て申所もあり・人みな石木ならねは・いつれかは後世のかなしからぬ・すへて十餘町トウのあひたに・念仏の聲絶す・まことに是佛法東漸フミホツトシセンのことはり・いちしるきわさなり」三〇中にも弥陞ミシの教へは經道滅尽キョウダウメツジン・我以慈悲哀愍ガイジヒアイミン・特留此經トクリウコキョウ・止住百歳シヂユヒヤクサイと説れし・如来ニヨライの金言キンゴン・いたたのもしく覚オホゆ・昼ヒルのことてれるひかりに・秋の螢ホタルの忍ひかねて・小家の軒ノキの下を飛行トビを・扇を

もてとりて・わらはのもてるさいてにつゝみて・是も家つとのためとても帰りぬ・ふたゝひすめ
 とよまれたる・堀川の橋を渡るに月見る人いとおほかり・かくてをのか家に帰りて身を休め心
 をしつめて・けふの見し所く・更におもしろく思ひ出らる・うたゝすみわたる月に三閼へも
 いらて・念珠つまくり・口には仏号となふるも・心は見ぬ浦山にかよふこそ淺間しけれ・二千里
 の外と・作られたるもけにさらんかし・輪王の代ならましかは・卑夫と成ても・遠き境をかけら
 まし物を・中にもゆかしきは・さらしなや娘捨山こそなくさめかねつといへるも・猶心にくけ
 れ・むさし野の草の原の月は・入へき山もなく・さはるへき梢もなくて・心のまゝに見てまし・
 今夜たれ篠吹風を身にしめてといへる・芳野の嵩こそささひしからん・ことに神路山に出ん月
 は・心三〇のやみもはれつへし・葛城や豊等の寺のえの葉井は・いとおほつかなく人もいへる
 を・鳴の長明かこまかにかけるにそ見る心ちす・程ちかき所にも・大比叡や・横川・比良・鏡の
 山は・猶曇りなからん・雄嶋松嶋には・あまたにも心ありけにきこゆ・清見か関に・旅ねすらん
 人はたうらやましく・夜もすから富士の高根に雲消なは・三保の浦松も見えわたりぬへし・伊勢の
 海や・清き渚と・いへるこそ名にもしるけれ・すへて戀しきかたのおほかる・ゆらの湊・吹上の
 濱・吹飯のうら・あは三〇とはるかに・淡路潟・あかしも・須磨も・をのかうらくさまくいひ
 つゝくるも・わりなき心のすさひにや・かつは妄想の念にさへられて・一大事の忘れましき事
 を・忘るゝにこそ・一心の阿弥陀仏を念したてまつる・夜も更行に・窓にさし入月いとあかく・
 心もすみ渡りければ・是そあみた佛の右にたゝせ玉ふ・勢至菩薩にておはしましけるよと思ひ出
 られて

我頼むほとけにそふるひかりそと

きけはうれしき月の影かな」三三〇

二三五

觀世音菩薩は淨土にありては・仏の左にたゝせたまひ・世にあらはれては・日輪ニチリンとならせ給ふ・此二菩薩ニハツサ・まよひの衆生につきそひて・安養界アンヤウカイに道引給はんと・大慈悲ダイジヒの御つもりによりて・今此弥陀カンニダの本願ホンガンにあひ奉る事・よろこびてもく猶あまりあることになんと思へは・身もすゝろに踊るやうにおほえて・たうとき聖達セイダツの・よみをかれし・古き哥をなん書付たるを取出て・人のきかくもおもはゆければ・いと忍ひてかすかにうたふそのうた」三三二

歌唄讃 空也上人

一たひも南無阿弥陀佛といふ人の

蓬の上にのほらぬはなし

二三六

菩提寺柱の虫くひの哥

しるへある時にたにゆけこくらくの

道にまとへる世の中の人

二三七

僧都源信

我たにもまつ極楽にむまれなは

しるもしらぬもみなむかへてん

歸命盡十方无碍光如来」三三三

二三八

歸命盡十方无碍光如来

歸命盡十方无碍光如来

行基菩薩

かりそめに宿かる我そいまさらに
ものなおもひそ佛とをなれ

永観律師

二二五

いにしへにいかなる契りありてかは
弥陀につかふる身となりけん

慈鎮和尚

二二六

人も見るも我身を見るもこはいかに」_{三三}

なむあみたふつ南無阿弥陀佛

二二七

南無不可思議光如来

南無不可思議光如来

南無不可思議光如来

源空上人

身はこゝにまた有なからこくらくの

聖衆シャウジュの数に入そうれしき

蓮生法師

二二八

おもひたつころはかりをしるへにて

我とはゆかぬ道とこそきけ」_{三六}

湛空上人

二二九

六の道いくめぐりしてあひぬらむ

十聲一こゑすてぬちかひに

南無^{ナム}至^シ心^{シン}歸^キ命^{メイ}阿^ア弥^ミ陀^タ仏^{ブツ}

南無^{ナム}至^シ心^{シン}歸^キ命^{メイ}阿^ア弥^ミ陀^タ仏^{ブツ}

南無^{ナム}至^シ心^{シン}歸^キ命^{メイ}阿^ア弥^ミ陀^タ仏^{ブツ}

親鸞上人

生れ来て南無阿弥陀仏にあふ事を

寝てもさめてもよろこひぬへし

蓮如上人^{ニセウ}

弥陀の名を聞うることの有ならは

なむあみた仏とたのめみな人

善知識

阿弥陀佛と唱^{ナツ}ふる人のこゝろこそ

木にもきさまぬ弥陀のたゝちよ

すてに時もりの・打^ツなす鼓^{ヅミ}も聞え・寺^テのかね月も・停^{テイ}午^ゴに及ひぬ・眠^ネの出るまゝに・真^マ木^キの

板戸をさして内に入・かくはかりおしと思ふ夜をなといひて・もときあへる人もあらむかし・所

くありきこうしにたれは・跡さきも^ミしらて・いねたる秋の夜も名のみにや・ねさめの枕に

鳥の聲を聞て

かけの尾のなかつてふ夜のこよひたに

をのか啼音に月そかたふく

とよみて・とかくするほとに・夜明にけり・けふも又暮ぬへきにこそ

南呂中句記之

六字堂 宗惠「モウ

壽昌院は君をいためること葉

母公世をさらせ玉ふてければ・つれ／＼と山中にこもらせいまそかると聞し・時はみな月望はかりになん・所は北山陰・木々の梢しけりて・あけたては蟬のおりはへ鳴・くれない涼しき風吹て・螢高く飛かふ・草むらの露のよすかにも・ころをいたましめ玉ふらんと・をしはかるもなを心あさくや・彼在五中將の・くれかたき夏の日くらしなかわれはのことの葉・思ひ出侍し・やつかれにいとねんころなりければ・まうてとふ「オらひぬへきを・身もわつらはしく・てる日につちもさけて・いと暑きころをひなれば・ほいにもあらてやみぬ・せめての心はせをのへて物くるおしき三十一もしを・書つけたてまつるものならし

なけかしな影かたふきている月は

世のならはしのみしか夜のそら

はやしのかね下の弦「三」

予かおとうと重継をいためること葉

浮世の夢の中に・心をつくす事・なをさりならず・あら玉の年たちふる比より・待遠にのみ花を
 思ひ・寒帰るあらしに・をそく咲ぬへき梢をくやみ・や・春雨にほころひぬる折しもは・さらぬ
 野山にまとひ・色にそみ香にめてゝ・たはふれさまよふも・いくはくの日数そや・咲て七日とは
 いふめれと・嶺のあらし松の風にさそはれぬれは・心ならず散過ぬ・秋は月を思ふとて・しるへ
 なき闇にたとりて・山の端に待出る影をなかめ・酒さかなと「元」ありあへす・曉の雲をなけきぬ・
 人の世も是に過す・いとけなきむかしは・たらちめの親のまもりによりて・人と成し此かた・身
 をたてんとし・欲にふけり利にまとひ・人にあらそひ・恥をそれ・にくみなしひ・心の中のく
 るしみやむひまもなく・月をわたり日を送りて・四十餘年の霜雪をかさねぬ・いつを身の待事と
 せんや・月花は猶定まれる盛あり・人間老少不定なればしらす・今日にしもやあらん・しはらく
 も世をのとかに思ふ時なし・爰に予かおとうと・重継とて・よはひ三十あまり三とせの「元」春秋
 をむかへぬ・はらからおほき中に・父母の許につかへて・薪水の勞をほとこし侍りしに・いにし
 弥生の末・六日のあした・心ちわつらはしき事もなく・つとに起て・かしこ爰うそふき・見めく
 りしに・此世のえんやつきけん・眠かこたくして息絶ぬ・親妻子眷属足をそらに・まとひあつま
 り・よひいけく・面に水そきなと事をつくしけれと・よみかへるへき心ちもせず・是そ此如

露亦如電夢幻泡影の・如来の金言・なしかはたかふへきなれとも・まよひの心の浅ましきは・今初
 て『言』めつらしき事とおとろき・雨しつくとなき悲とも・何の益かあるへき・もしもやと笙の岩屋
 のためしも思はれて一日夜ひとよをきけれと・いよくこと變し面かはりぬれは・ちからなく後
 のわざともとりしたゝめ・ひんかし山のふもと建仁寺の西のほとりにいたり・一片のけふりとな
 し侍りぬ・やうく日数はうつりゆけと・かなしひは露をこたることなし・ふたりの親のなけき
 こりしは・いふにたらず・かなしひのいたりてかなしきは・老て子にをくるゝにしくはなし『言』
 ・歎のいたりて歎かしきは・若して親に先たつにはしかすとも・けにさる事そかし・抑此重継は・
 若き年のむかしより・佛の道をたらず・忠孝の心さしもふかく・仁義を見たらす・朋友のましは
 りも浅からざりしに・いかにそや有し世に・をろそかにせし事・悔の八千たひかなしめとも・な
 かるゝ水のかへらぬことはり・いかゝはせん・返魂香をたく法をもしらされは・煙の中に佛を見
 んよすかもなく・まほろしも今は世になければ・玉のありかをしらするつもなし・夢ならて逢
 事もなき『言』を・物おもふ時のくせなれは・いもねられす・うつし心もあらぬに・延陀丸のかた
 より・せうそこ有・奥に哥をよみて

いかなれは花橘のしもつえた

をかぬにかれてむかしとはなる

ととふらひきこえける・打なかめく・是に心すこしなくさみて・とく返しをなんし侍りぬ

枯にける花たちはなの跡とめて

山ほとゝきす音をのみそ鳴

かくなけかんも思へはよしなし・詮するところ・只『言』弥陁の悲願に乗して・彼常住の国に生れ

三三

三三

んこそ・再會^{サイヘイ}の期^キなるへけれと・念仏し侍る中にも・見る物聞^{モノキ}ことにつけて・思ひ出さすといふ
事なし・せめてのあまりに・思ひやのふると・和哥^{ワカ}をなんつゝる・こと葉^エつたなきを以て・すゝ
ろに筆をそむる事・かたはらいたく侍れと・取出て人の見るへきにしもあらねは・佛前にそなへ
んため・かたはし書付侍りぬ・あちきなきすさひ・なりけんかし

鉢^チにうへし木に・あるしなくなりて後・花

咲けるを見て」三〇

植をきしあるしをはなもこひ佐て

こほるゝ露やなみたなるらん

面かけもともに消なてかけろふの

それかあらぬる身をははなれす

なき跡をなけくなみたの川やしろ

いかにころもをほしてかはかん

于時寛永拾八年卯月初つかたにしるす」三一

家とうしめのおとうとをいためる言葉

年ころ家とうし・めのおとうとをもて侍しに・はつき十日のころをひより・心ちいたつかはしき

事をほのきくに・れいもさるわきなん・たひく有しにならひて・ことにも思ひあへぬに・おなしきもちばかり六日になん・あたし野の露きえぬと人していへり・かそいろはあしを空にまどひて・なけきかなしめるもことはりに過ぬ・所は雲ゐへたゝる・津の国生玉とかや・名にしも似ぬよはひにもあるかな・せうとなきからをた「言」に見んとていそく・一日二日ありて・せうそこをこせたり・をはりのたゝしきさま・一すちに御法を思ひ入・二首の哥をなん残す

うたかたのあはれきえにしあととはは

水子とりなんたのむみな人

三五

弥陀の名をきくさへいと嬉しきに

なむあみた仏へいまそまいらん

三六

見る人あやしみ・聞人袖をしらぬはなし・むらさきの色こき時はと・何くれの事もわかれぬあはひなれは・せめてはをのかこゝろさし「言」をのへて三十あまり一もしを・つゝしり侍るものならし
ありきぬの有し世にたにまれに来て

とまらぬ人をいつとまつへき

三七

せなの心を思ひやりて

日影そふ霜とのみしもきえ人の

またらふすまを見るやかなしき

おとこ山さか行宿のをみなへし

なとかまたきに花のちるらん「言」

三九

物の心をやはらくるは和哥にしくはなしとかや・爰に六字堂宗惠はやうより頭の雪つもるまで・この道のはしつかたをこのみ・今そしるてふ阿波の鳴門にもまさりぬへき世渡る中にもすてす・しかあれはいぬる萬治三年仲の秋名所の松の葉をかきあつめてなき跡に残さむと思ひ侍るつゝてに・例の題をとりあるは四つの折ふしもをくれたるすちをいひかはし・あるはあさき野山によるほひ別路をなけく言書をもしるし置ぬれと「言」・斧にもれぬる樗木の用ゆへき類ひにしあらねはとて・かいやりつく・しみといふ虫の住家になりしを・予そのはしくれをひろひ集て・四巻の書となし・續松葉集と名付侍ぬ・本より爪くはるゝくたりくを引つくるひて見むあたりをこふ物ならし

延寶二年寅のはつきはしめつかた

あるにしたかふ軒端にてはしり書侍る

吉野屋惣兵衛板行「三ッ